

2021

令和3年7月

営農だより

害虫防除の色々



赤色ネットハウス・白色ネットハウス



ブームスプレー



防虫ネットトンネル(タフベル、サンサンネット)



ハウス内黄色粘着テープ

いよいよ夏本番です。こまめな水分補給と暑さ対策で熱中症の予防を心がけましょう。

<<<安心・安全な農産物生産は生産者の責任として>>>

農産物の農薬使用状況は専用の帳簿（用紙）に記録し、開示（明かに）出来ることが必要です。京都府のブランド認証野菜・茶・米は、記録の提出と記録内容の確認を行っています。他の出荷野菜も出荷先から記録の有無点検の結果証明を求められる事例が増加しています。更に、残留農薬検査にあつては、検査機関から検査に際し記録の提出を要求されます。速やかな提出が信頼につながります。

掲載内容について、ご不明の点は最寄りの支店営農担当・営農経済センター

または、本店 営農部営農指導課へお尋ね下さい。

 JA 京都やましろ

営農部 営農指導課

TEL (0774) 62-5890 FAX 62-9450

北部営農経済センター

TEL (0774) 64-7200 FAX 64-7205

南部営農経済センター

TEL (0774) 76-0003 FAX 76-0005

水 稲

良質安定生産を目指す稻作中期の管理

7月は、梅雨の後半から夏に向かって天気の変動が大きい時期です。台風や前線活動による大雨と、梅雨明けが早いか遅いかで大きく変わります。5月25日発表の3か月予報では7月前半の気温は平年並み、降水量も平年並み、下旬は晴れの日が多く、気温が高く雨は少ないと見込まれています。しかし、太平洋高気圧の強弱や位置による台風の襲来に備え、水路管理と清掃に留意が必要です。

I 水稻の栽培管理

◆ 中干し：◎早期・早植栽培の中干は6月下旬に終わりますが、梅雨の雨が続いている場合は不完全となります。状況を見て判断し、ひび割れがなければしばらく続けてください。

◎普通・晚植栽培では7月に入りて平均茎数が20本／株位になれば中干を始めます。梅雨明けすると早く乾きますので大きくひび割れしない程度で入水し、7月中であれば再度干すのも良しとします。晴天が続くと地割れが行き過ぎ水が溜まらなくなる場合があります。状況を見て判断してください。

◆ 幼穂形成期と穗肥：◎早期・早植栽培

6月末～7月第一半旬(1～5日)頃が穗肥期と見られますので穗肥の時期となります(元・穗肥一発の場合を除く)。穗孕期以降は急速に穂が生長しますので、田に水がある状態で管理します。7月第6半旬(26～31日)は出穂期の見込みです。

◎普通植栽培は8月上旬が見込まれます。出穂期や穗肥量等を予測するシステムの運用は始まっていますが、それぞれの場面については、栽培者自ら幼穂(穂の素)が出来たか確認をして穗肥の施用をしてください(元・穗肥一発の場合を除く)。◎確認方法は、田の平均的な生育場所の株の草丈の最高葉の茎を抜き取り、最上葉の葉鞘(ハカマ)の基部(節)の上部を開いて幼穂5～10mmを確認できれば、やましろ有機穂肥は全量を1回に、NK化成など高度化成は10日後との2回に分け半量ずつ施します。

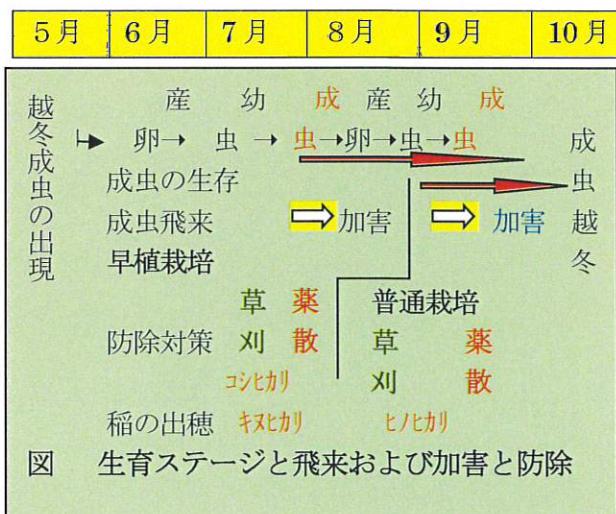
II 病害虫対策

◆ カメムシ対策 ◎発生とイネへの飛来

主な生息場所は右上の枠囲いのとおりです。稻出穂し稔実し始めると周辺から飛来し、図のように吸汁加害します。防除は稻の穂が出る10日前頃の稻田周囲の草刈りと穂が傾き始めてからスタークル・アルバリンなど収穫前日数の短い薬剤の散布を徹底します。

斑点米カメムシ類の主な生息場所

堤防 耕作放棄地 道路等側面 休耕田の雑草
畦畔 その他利用・管理の不適切なイネ科雑草地



◆ 紹枯病：高温化のため紹枯病の発生被害が増加傾向にあり、病状が止め葉に及ぶものが発病田で多く見られます。病状が進むと倒伏・捻実不良を生じます。毎年発し被害を生じる田では、肥料を控え目とし過繁茂を避け、7月上旬にモンカット・モンガリットなどの粒剤を畔回りを重点に散布して初期発生を抑えてください。

◆ 葉いもち：梅雨期間中に4～5日以上曇雨天が続いた場合で、いもち病予防剤の箱施用(側条施用)を実施していない場合は発生に注意し、発生を認めたら防除をしてください。

◆トビイロウンカ：昨年坪枯れ被害が発生したウンカが本年は先の梅雨入り前後の低気圧・前線活動により、近県では大阪府・奈良県・徳島県などで飛来が認められています(6月1日現在)。

京都府では田辺・亀岡・弥栄とも認められていません。今後についても情報が入り次第、メール配信サービス等でお伝えしていきます。

野菜

梅雨後半から梅雨明けの野菜栽培管理

例年比 20 日も早く梅雨入りしましたが、6 月上旬までは比較的無難に過ぎています。近年の梅雨の傾向は雨か晴かで変動が大きいと言えます。野菜栽培では程々でないと栽培管理に支障を来します。このため、大雨に備えては支柱の補強、排水対策、病害予防と初期防除を、晴天続には灌水対策と害虫の侵入防止や早期発見、初期防除の準備をして、被害に至らないよう梅雨後半に向け対策を進めてください。

I 梅雨後半の大雨・風雨対策

- ◆ 事前対策：梅雨後半には前線活動の活発化や台風の襲来に備えます。
◎ハウス栽培では雨と風に対する補強対策を行います。ハウスバンドの緩みや周囲の排水溝の点検と排水路への接続を確実にします。
◎露地栽培では支柱の補強、誘引・整枝、剪定・摘葉、畝間の残渣整理、敷き藁・マルチの実施、排水溝・水路点検、土留めを事前に済ませます。
- ◆ 事後対策：大雨で浸冠水した場合は出来る限り早期排水に努め泥は洗い流し、ごみは除去します。排水後損傷枝を除去し、支柱等の点検と補強を行い、収穫・整枝・剪定を行い病害等の恐れがある場合には薬剤散布を行います。
◎露地軟弱では、排水して畝表面が少し乾いた状態になればコサイド 3000 等の銅剤で細菌性病害予防を行い、中耕できる場合は畝の片側毎に2・3日開けて施肥と中耕を管理機で行います。
◎ハウス栽培では換気と排水に努め、畝間が乾いてから整枝・剪定・収穫を行い病害の恐れがある場合は薬剤防除を行います。更に、50~60%程度の外部遮光により温度を下げるよう検討してください。また、台風によりハウスに損傷を生じた場合は当面の応急処置を行います。

II その他一般管理

- ◆ 果菜類の整枝・剪定・摘葉：梅雨期間中は曇雨天になります。整枝・剪定・摘葉を適切に行い、通風・採光を図って病気の発生を抑えます。

露地ではこれら管理や収穫は晴れ間や降雨の止み間に行います。腋芽かきは切口を1cm以上残し腋枝の水滴に切口が浸からないようにします。

- ◆ 施肥・水分管理：果菜類では、葉色、花弁の色、茎と柱頭の大きさなどに注意し、追肥を遅れないように施します。ナスの硫酸マグネシウムは 7 月上旬頃から 40kg/10a 程度施します。梅雨明け後は強日射が予想されます。露地のナス、えびいもは特に灌水に留意します。ハウスのトウガラシ類で秋まで栽培する場合や軟弱野菜では、ハウス外遮光 60%程度を行い高温の抑制を考えてください。

また、乾燥すると良品生産に影響しますので、根痛みを起こさないよう畝間灌水は水位に注意しながら、チューブ灌水は地温が低下してから適度の灌水に努めてください。

III 病害虫防除

- ◆ 病害：◎ハウス栽培果菜類では乾燥気味になりうどんこ病に注意が必要で、高温多湿になるとキュウリの炭そ病、褐斑病が発生しやすくなります。
◎露地では梅雨期間中はキュウリのべと病、疫病、ナスの疫病、褐色円星病に注意です。梅雨明け後はナス科野菜の青枯病、半身萎凋病が発生しやすいですが、梅雨期間中から畝間灌水の水位変動や常時湛水を少なくして根痛みを防ぐことが予防になります。
- ◆ 害虫：降雨が減少すると共に発生が多くなります。梅雨期間中でも晴れ間が続くと雨の掛からない下葉やえびいもの葉裏でハダニの発生が始まります。よく観察し初期防除に努めてください。
◎ハウスでは梅雨明け後アブラムシ類、ハモグリバエ類、コナジラミ類の発生に注意です。
◎露地ではアブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類、ナスのテントウムシダマシ、コガネムシ類、オオタバコガ、カスミカメ類、キュウリのウリハムシ、ウリノメイガ、えびいものハスモンヨトウ、スズメガ類、コマツナのコナガ、キスジノミハムシ等に注意です。

表紙写真説明

赤ネットハウス 赤色=アザミウマ対策
ネギアザミウマ 他飛来害虫

白ネットハウス

各種野菜に適用可能 飛来害虫に有効
トラクター装着ブームスプレー
野菜類の効率的防除作業 大規模向き
防虫ネットトンネル

低丈作物の飛来害虫に有効
ハウス内黄色粘着テープ（トラップ）
コナジラミ類 アブラムシ類を誘引捕殺

茶 樹

二番茶とその後の茶園管理

昨年に続き今年も一番茶の萌芽が早く、5月・6月お気温が高めに経過しております。この影響で二番茶芽の生育も昨年同様に早目に進んでいます。二番茶の摘採期も早まります。遅れないよう適期摘採に努めてください。気温が高めに経過していることから刈取後の茶の生育も早まります。

梅雨後半は梅雨前線活動や台風の影響によっては、大雨も懸念されます。梅雨の降雨日数が多いと病害の発生が、また、晴れ間が多く経過した場合や梅雨明け後には害虫の発生が多くなります。茶芽の生育状況と併せて、定期的に茶園の内部まで見回り施肥・防除・排水・日除けの管理をしてください。

I 摘採及びその後の管理

◆ 二番茶の摘採：二番茶は梅雨後半に入り、気温・湿度とも高く降雨も多い時期に当たります。

茶芽の生育が年間で最も早く、雨などで摘み遅れると、出開きや硬化が早く進み摘採適期が短くなります。

本年は一番茶が早く、二番茶も気温高めに経過していますので、茶芽の生育に注意して製茶工場の能力に合わせて計画的に早目から摘採を始めて、適期摘採で良質茶生産に努めてください。

◆ 二番茶摘採後の施肥：二番茶摘採後は気温も高く茶の生育が早いので、お礼肥は3番芽の生育を促す肥料ですので芽の生育に間に合うよう早目に、窒素成分で10kg／10a程度を基準としますが、茶園の条件や芽の伸び具合をみて判断し施します。なお、大雨が予想される場合は成分が流亡する恐れがありますので、降雨後に施します。

◆ 大雨に備えて：梅雨の後半は大雨が多く、近年は短時間に大量に降る集中豪雨の被害が发生しやすい傾向があります。

大量の豪雨は茶園の土を削って流亡や崩落させることが多いので、これを防ぐため、敷き藁、排水溝の清掃、土留めを行ってください。

◆ 二番茶後の整枝：二番茶の摘採が早く終わった茶園では、二番茶後の整枝が可能です。

しかし、摘採が7月後半に及び8月中旬までに夏芽の生育が望めない場合は、茶樹の樹勢の回復面から整枝を避けることを選択してください。

II 病害虫の発生と防除

梅雨後半は気温・湿度共に高くなることが多いので、病害が発生しやすくなります。

梅雨明け後には害虫が発生しやすくなります。茶園を見回り早期発見・早期防除に努めてください。

なお、健康に留意して日中の高温時の見回りは避けて行動しましょう。

◆ 輪班病・新梢枯死症：どちらも輪班病菌によって発生し摘採時の鉄や摘採機の摘採の傷口から感染します。一番茶、二番茶は発病する前に摘採するので、発病は見られませんが夏芽（三番芽）は茶樹の樹勢回復のため、摘採しないので発病に至ります。輪班病は新葉の拡大した病斑に同心円状の斑紋を生じます。

新芽への病原菌は包葉、不完全葉の離脱傷口から3日以内に侵入します。多発園では二番茶摘採直後及び夏芽の萌芽期と第二開葉期に防除を行います。

また、新梢枯死症は新葉が展開を終わり成葉になった頃、新梢の一部に変色（壞死）部を生じ、これより先端部が水分欠乏状に枯死します。

防除は輪班病に同じです。

◆ 炭そ病：葉に褐色の病斑を生じ病斑内に小黒点が見られます。梅雨期と驟雨期に発生しやすく日当たりの不十分な園に発生しやすいです。

防除は手摘園では二番芽から、鉄摘園では三番芽から行います。防除時期は第一、第二開葉期に適用農薬で防除します。

◆ もち病：初期の病斑は飴色の斑点で、大きくなると裏側に丸く膨れ、餅のように見えます。

日陰地や覆い下の露の取れにくい場所に発生し易く、常発地は窒素肥料を多用しないこと及び二番茶被覆を避けることが必要です。

葉剤防除は第一開葉期から2・3回茶芽の生育に合わせて防除を行います。

◆ 害虫の発生と防除：梅雨期間中にあっても降雨が少ない場合や梅雨明け後は、ハダニ、ミドリヒメヨコバイ、キイロアザミウマ、ホソガなどの発生に注意し、発生初期の防除に努めます。